咎人の花

上岡馬永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
咎人の花

【Ｎコード】
Ｎ１６４３ＢＡ

【作者名】
上岡馬永

【あらすじ】
――――これは縁なのか。
美しい少女との出会いが、少年の運命を狂わせてゆく。
【※この作品は既に投稿されてあるものを訂正・短く区切ったものです】

序章（前書き）

よろしくお願いしまーす。

序章

赤を薄く引き伸ばしたような暮れの空に、鰯の群れたような陰影のない雲片の雄大な様を見上げて、彼は音もなく笑った。

「今年は、飢饉から逃れられたな」

その黒髪は涼やかな風にそよがれ、彼はどこか愁いにも似た思いに浸っていた。決して端麗な容貌とは言えないが、面立ちの穏やかで人好きしそうな姿をした少年だった。年の頃は十四、五だ。擦り傷の目立つ右手には、黄金色の今にも零れ落ちそうな穂を蓄えた稲が二、三把（しっか）（わ）程一聢と握られている。

「本当に安心した。今年は冷害が訪れなくて良かったね、お兄ちゃん」

冷たい土を踏む音と共に、一人の小柄な少女が歩み寄ってきて、彼の隣に並んだ。肩の上で切り揃えられた黒髪の先端が、彼同様に僅かに揺れている。彼の妹の、未だあどけない十二の少女だった。

そう、この土地はつい昨年まで冷害に悩まされていた。今より六年前の冷害の年、この娘の両親は饑餓により帰らぬ人となったのだ。それを憐れんだこの少年の親切によって、当時寄る辺の無かった娘は引き取られたのだ。つまり、正しくは“義妹”である。

彼は妹の頭の上に手を乗せると、慈しむように撫でてやった。

「うん、良かったな。祈りが神様にきちんと届いてる証だ」

「来年も、そのまた次の年も祈り続けようね」

妹はこれ以上にないと言ったような満面の笑みで彼の着物を掴み、

甘えるように擦り寄ってきた。十二にもなってこの調子で懐いてくるのだから、彼としては将来無事に自立できるかどうかで気苦労が絶えなかった。その都度自分は親身だな、と思いながら苦笑した。

「それまでに生きていられたらね」

「やだ、そんな不吉な言い方」

妹は厭そうに頬を膨らました。彼はそんな妹の幼い面を見て、可笑しげに笑う。

「御免な。でも兄ちゃんはな、すぐにでも菊に一人前になって欲しいんだな」

妹は小首を傾げた。

「どうして？」

妹からの突然の疑問に、彼は一瞬迷う。

「どうしてって……まあ、自分の面倒は自分で見ないとな。兄ちゃんの身に何時、何が起こるか分からないんだから」

「またそんな事言って。悲観的なんだから」

妹の仏頂面を見て、彼はまた自分の悪い癖が出たな、と他人事のように思った。殊自分の身に関しては、妹の将来が絡んでくることもあってどうも案じずにはいられなかった。

「俺、悪い事したみたいだな」

妹に控えめにそう言うと、

「そうでしょ。毎度そうやって私を不安にさせて、私は絶対にお兄ちゃんから離れないからね」

語気強く、菊はぐっと彼の腕を抱き締めてきた。言葉通り、離すまいと。いじらしい娘だと、自然と彼の口から笑みが零れた。そして次の瞬間には、彼からはふとある悪戯心が湧き、一つ声を上げていた。

「あっ、菊が余りに強く締めつけてくるものだから腕が潰されそうだ！　これだけ逞しければ一人でも生きていけるな」

「えっ？　……もうっ、驚かさないでよっ。潰れるわけないじゃない」

妹は一瞬跳び上がって腕から飛び退いたと思ったら、忽ち顔を不機嫌一色に染めた。

「あれれ？　真に受けないのか……」

彼は呆然とした。これは冗談でも悪戯でもなく半分本気だった。少しくらいの効果で菊をその気に傾けられるという自信があったのだが、案外すぐに気づかれた。

「お馬鹿さんね。私、もう十二だよ。そんな悪戯もう弁えてるわよ」

「つまらないなあ。もうそんなものか……」

そう、娘はもう十二だ。あの頃の、六つの娘ではないのだ。彼此……そう、既に彼此六年もの歳月が過ぎていたのだから。

彼の目は六年間もの記憶の流れを瞬時にして辿り、年に似合わず早くも追懐していた。

「苦悩はあったけど、案外早いものだな。この調子で、菊もあっという間に何処かに輿入れするんだろうな」
「やだ、やめてよっ」

その時、如何にも悲鳴じみた声を上げて妹がばっと抱き着いてきた。彼は傾いて転びそうになるのを何とか踏み堪える。丁度彼女の頭が、彼の顎の下にきた。その体は怯えるように、微かに震えていた。

「私、知らない男の人になんか嫁入りできないわ。だって、お兄ちゃん以外の人は信用できないもの……」

不安と哀しみに打ち沈んだ、幼い少女の微かな震え声。
彼は困ったような顔で妹の頭を撫でてやる。彼のみならず、彼女にも悪い癖はあるのだ。それが人間の性なのだろう。

「菊……甘えちゃ駄目だ。女の人は夫がいないと、とても生きていけないよ」
「私にはお兄ちゃんがいるものっ」

妹は益々抱き着く手に力を込めてくる。彼女の涙ぐんだ声に、彼はこのままではいけないと思った。

「わ、分かったよ。一旦落ち着こうか」

彼は妹の肩の上に手を置き、そっと体を離した。妹は暗く沈んでいた顔を上げ、瞳を潤ませた。彼はそれを見て、僅かに罪悪感を抱いた。
彼は一度だけ軽く息を吐くと、腰を少しだけ屈ませて妹と視線を

合わせる。

「お兄ちゃん……」

妹の不安に歪められた幼顔を見て、彼はやれやれと苦笑した。もう十二歳だとは言っても、やはり未だに十二歳である。さて、このままでも仕方ないから兄貴としての本分を発揮するか。

「兄ちゃんの事、好きか？」

そう確認すれば、菊は幼子のようにこくりと頷いた。彼も内心でよし、と頷いた。

「お前は兄ちゃんに迷惑かけても良いと思うか？」

引き続き確認を取れば、妹は今度は首を横にぶんぶん振って強く否定した。彼の中では申し分ない反応だ。

「だったらな、兄ちゃんの言う事はできるだけ聞いてくれないか？勿論お前との二人暮らしは、俺にとっては神様が与えて下さった尊く幸福なものだよ。でも結婚する事もまた、尊くて幸福なものなんだよ」

「う、うん」

相変わらず妹の表情は暗いが、一生懸命に耳を傾ける分には救いようがある。彼はそれを確認した上で、優しく微笑んでやる。

「菊は賢い子だ。甘え癖は中々考え物だけど、人を信じる事は大切だぞ」

「う、うん。お兄ちゃん」

妹には徐々に、明るい笑顔が取り戻されてくる。彼はほっと胸を撫で下ろし、彼女の頭をまた撫でてやった。

「でもお兄ちゃん。今は私、お兄ちゃんと一緒にいて良いでしょ？」

「そうだなぁ。こんな甘えん坊、今はとても手放せないしな」

「ふふっ。お兄ちゃん大好きっ」

妹の顔には、溢れんばかりの幸福が満ちた。

さわさわと揺れる芒の茂みの中、二人の兄弟の仲睦まじく寄り添う影があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1643ba/

咎人の花

2012年1月4日03時46分発行